京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十卷　第五號

大正十四年五月一日發行

論叢

失業者統計概說……法學博士　財部靜治
課稅と時の元素……法學博士　神戸正雄
我國近世の土地問題……經濟學博士　本庄榮治郎
御家人の特質……文學博士　三浦周行

說苑

朝鮮の雜種農業……法學博士　河田嗣郎
保險の本質に就て……法學士　小島昌太郎
アダム・スミスに於ける勞働價値法則の妥當性に就て……經濟學士　森耕二郎
マルクスの絕對地代に就て……經濟學士　八木芳之助

雜錄

金利に關する一研究……經濟學士　蜷川虎三

法令

輸出組合法・重要輸出品工業組合法・染料製造奬勵ニ關スル法律・外國人土地法・預金部預金法・大藏省預金部特別會計法・大藏省預金部特別會計規則・預金部資金運用規則・日本銀行ノ手形割引ニ因ル損失ノ補償ニ關スル法律・教育改善及農村振興基金特別會計法

アダム・スミスに於ける勞働價値法則の妥當性に就て（一）

森耕二郎

緒言

勞働價値說は、遠くペティ、ボアギュベールより、スミス、リカアドを經て、ロートベルタス、マルクスに至る間に於て、一聯の糸を曳きつゝ發展し來つたものであつて、經濟價値學說史上極めて重要なる地位を占めてゐることは今更申す迄もない。而してこれらのものに依つて主張せられたる諸々の勞働價値說は、各々その特徵を有し、その內容に於て相互相異なるものがあるのであるが、姑く勞働價値論が經濟學上の研究問題の一として未だ組織的に取扱はれなかつたものは別として、スミス、リカアド、およびマルクス三者の勞働價値論が、各々その有せる特徵および重要に依り、勞働價値說史に於て大體三つの時期を劃してゐると見ることには、大した異存がなからうかと思ふ。

今この三つの勞働價値論の有つてゐる各々の特質を顧みるときは、吾々は、勞働價値論が、一

般的に、單にその史的發展の點に於てのみならず、その內容そのものゝ點に於ても亦、スミス、リカアド、マルクスの順序を追うて發展成長して來た事實を認めざるを得ない。勞働價値說が發達成形するに至つたと認めらるゝところの點は、例へば勞働價値そのものゝ本質に就て、隨つて又勞働價値の內容實體を成すところの勞働の意義に就て、（絕對若くは眞實）價値（格）、相對價値、交換價値および生產價格それ〴〵の本質並に關係に就て、その他剩餘價値說の觀念に就てなど、數多く見受けらるゝであらうが、とりわけ勞働價値法則（この場合與へられたるものと見る）が、その初め、資本家的社會の下に於ける貨物の交換關係の究極の支配法則として、明に、充分に、取扱はれなかつたものが、漸次純化せられて、貨物の交換價値は結極するところ勞働價値法則により支配せられ決定せらるゝものであるとせられ、遂に勞働價値法則本來の立場に到達するに至つた、と云ふことは、卽ち勞働價値法則の妥當性（資本家的生產方法の下に於ける貨物の交換價値に對する）に就ての見解の發展は、その最も重要なるものではなからうかと思はれる（勿論右に述べたる諸點は相互密接なる關係にあるから、各々獨り相分れて發展すると云ふことはない、勞働價値說の發展とは、事實上、これら諸點の同時的發展を意味するものではあるが）。更に詳しく言へば、スミスの文明社會に於ける價値論には、（費消）勞働價値說と生產費價値說との二つの價値說が、相交錯して、若くは表裏の關係に於て、主張されて居り、そうして私は、このこと自身は、多くの批評家と反對に、彼れの價値論の缺點ではなく、寧ろその長所であると思ふのであるが、しかし彼れの價値論には、この二つの價値論の外なほ支配勞働價値說があつて、それらは

相錯交して主張せられてゐるがため、この二者の關係は、彼に於ては、極めて曖昧のものであつて、結局生產費價値說がかゝる社會に於ける彼れの價値論として、表面上に浮び出てゐる。スミスに於ては(費消)勞働價値法則の貨物の交換關係に作用することは、極めて不純なる形、不充分なる程度に於て、支持せらるゝに過ぎなかつたのである。ところがリカアドは、スミスの價値論よりその支配勞働價値說を除外して、その本來の形に於ける勞働價値說のみを主張し、それを以て資本主義社會に於ける貨物の交換價値を說明せんとしたのであつたが、彼は資本の持續性の段階如何が貨物の交換價値、價格に及ぼす影響の問題、若くは勞働價値と生產價格との離隔の問題に逢着して、遂にその勞働價値說に一種の修正若くは制限を施さゞるを得ざるに至つた。かくてリカアドに於ても、勞働價値法則の現實の交換關係を支配することは、充分なる程度に於て、最後迄固執せられて居らぬのである。而してマルクスに至つて甫めて、勞働價値法則は、假令個々貨物の生產價格はその勞働價値より乖離することあるも、究極する所貨物の現實の交換關係、交換價値を內的基本的に制約支配するものであるとせられて、一層正確に言へば、現今の高度に發達せる商品交換社會に於てのみ、それは貨物の交換關係の事實上の支配原理となるとせられて、勞働價値法則の妥當性に就ての見解が當にあるべきところに持ち來たされたのである。このこと——卽ち勞働價値法則が現今の資本家的生產方法の下に於ける貨物の交換價値を實質的に經驗的に支配するといふことが、組織的に明瞭に說明せらるゝに至つた所の發達經路——を、これらの代表的なる價値論に就て吟味することは、卽ち勞働價値說の當に主張せんとするところの如何な

るものであり、且つそれが現今の生産方法の下に於ける貨物の交換價値の如何に重要なる說明であるかを瞭にする所以の一であつて、私がこの論文に於て取扱うとする所の問題を成すのである。

從來の勞働價値論に對する反對論の多くは、諸々の勞働價値論の間には、諸々の點に於て、大なる差異があるものであること、ならびにそれらの勞働價値論の間には自ら一定の發展が認めらるゝこと、を顧みず、勞働價値論の當に主張し瞭にせんとする所の如何なるものなるかを深く吟味することなくして、たゞそれらを一束して粗朴なる批評を敢てするを常とする。のみならず勞働價値論に理解あるものゝ間に於ても、最も完熟成形せるものであるとせられて居る所の勞働價値論、例へばマルクスの勞働價値論が、如何なる生産方法の下に於ける貨物の交換現象を、如何なる意義に於て、說明せんとするのであるか、卽ちその本質如何、に就ては、今猶ほ諸々の解釋があるのであつて、容易に一致したる見解に達するに至らない。私がこゝにこの試みを企てやうとするのは、實はこられの二つの事情に促されたに由るのである。

私は先づ初めにスミスの勞働價値論に於て、（費消）勞働價値法則が、資本家的社會に於ける貨物の交換價値の說明として、如何なる意義に於て、如何なる程度に於て、取扱はれてゐるかを見るであらう。

前論

(一)

本章に於て、私は、勞働價値說を市めて組織的に述べたる所の、そうして後に現はれたる諸々の勞働價値說は、殆んど皆本來的にそれより流れ出でたるものであると云ふことができるであらう所の、スミスの勞働價値說に於て、勞働價値法則の妥當性が如何に取扱はれてゐるかを見ることにより、彼れの勞働價値論に對する理解の程度の如何なるものなるかを考へて見たいと思ふ。ところがそれを見定めんとするに就ては、彼れの謂ふ所の價値論の如何なるものなるかの大體を豫め會得しておくことが是非とも必要であると思ふのであるが、スミスは『思想を論理的に組織化するよりは、寧ろ思想の豐富なるを以て有名なる學者である』[1]、と云ふことは、いくらか言ひ過ぎたる言葉であるにしても、兎に角彼れの價値論の內容は頗る錯綜を極めてゐるがため、今猶ほ彼れの價値論の解釋に就ては、こゝに問題とせんとする點に就ては勿論、その他諸々の點に就ても、諸々の異說があるのであつて、吾人をして容易にその眞相を摑ましめ得ないのである。

スミスの勞働價値論の根本的命題と見るべきものは、およそ左の如きものであらう。

『人が富裕なりや貧窮なりやと云ふことは、彼が人生の必要品、便利品及び享樂品を享受することができる程度如何に依るものである。ところが分業が一たび充分に行はれたる後は、一人の勞働が彼に供給するところのものは、これらのものゝホンの僅かの部分に過ぎない。その遙かに大部分を彼は、他の人の勞働より得ねばならぬ。だから(この場合に於て)彼が富裕なりや貧窮なりやと云ふことは、彼が支配し、若くは購買することができるところのその勞働の分量如何に依

1) Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques, p. 89.

つて定まらねばならぬ。それ故に或る貨物が、之を所有して居つて、そうして彼れ自身これを使用し又は消費するのでなくして、之をば他の貨物と交換しやうと思つてゐる人、に對して有する價値は、その物が彼をして購買せしめ又は支配せしめ得る勞働の分量に等しい。だから勞働こそ凡ゆる貨物の交換價値の眞の尺度である。

『各々の物の眞實の價値、卽ち各々の物が之を獲んと欲するものに對して眞實に費さしむる所のものは、その物を獲るがための骨折および困難である。各々の物が、己に之を獲て居つて、そうして之を賣り拂つて何等か他の物に對して交換しやうと思つてゐる人、に對して眞實に價値ある所以は、その物が彼れ自身をして之を免れしめ、且つ之をば他人の上に課せしめ得るところの、骨折および困難である。貨幣又は貨物によつて購はれるものは、吾々が自分の肉體の骨折によつて獲得さるゝものと同じく、結局勞働に依つて購はれる。この貨幣又は貨物は實に吾々をしてこの骨折を免れしめるものである。それらは、吾々が、その同じ時に同じ分量の勞働を含んでゐると思はれる所のものと交換する所の或る一定の勞働分量の價値を含んでゐる。勞働は總ての物に向つて支拂はれる所の最初の價格であり、本源的の購買貨幣である。世界の總ての富が本源的に購はれるのは、金又は銀に依つてゞはなく、たゞ勞働によつてゞある。それを所有して居つて、それを新らしい何かの生產物と交換せんと欲する人に對して有するそのもの、價値は、そが彼等をして購買せしめ、若くは支配せしむる所の勞働の分量に正確に等しいものである。』[1]

1) Smith, Wealth of Nations. Cannan's ed. V. I, pp. 32—3.

これらの章句およびその他の彼れの章句が示すが如く、スミスに依れば、商品交換社會に於て、貨物の價値、交換價値を決定する所の勞働は、その貨物の生産に費されたる勞働（骨折、困難）でもあり、又それはその貨物の支配、購買する勞働でもあるのであつて、彼はこの二者それ〴〵の性質及びその間の關係を明に意識することなくして、ともに交換價値の決定標準として堪へ得るものとした。（註一）しかし乍ら貨物の生産に費されたる勞働と、貨物の支配若くは購買する勞働とが、その本質上全く別のものであることは明である。即ち後者に依れば、貨物の價値は、一定量の生ける勞働を買ひ得べき商品の分量、若くは右と同じことであるが、一定量の生ける勞働を以て買ひ得べき商品の分量、に依つて決定せらるゝといふことになるのであつて、要する所、已にリカアド、マルクスに依つてよく指摘せられてゐる如く、[1]（註二）スミスは貨物の生産に費されたる勞働と、勞働者に對する報酬（勞働（力）の價値）とを、ともに等しく、貨物の交換價値の決定要素として認むるの誤謬に陷つたと云ふことができるのである。而してスミスは何故にかくの如く二つの概念を混淆したかと云ふに、それは、勞働價値なるものは或る一定の生産關係に制約せられたる或る社會的絶對的一般的なる關係なるに拘はらず、彼は價値、交換價値を具體的個々的相對的性質のものと觀念したによる[2]（彼にありては交換價値は他物購買力である、このことリカアドに於ても亦然り）、と私には思はれる。そは兎に角、貨物の生産に費されたる勞働の分量と、貨物の購買若くは支配する勞働の分量とは、勞働の結果が全部勞働者に歸屬する社會に於ては、單竟同一であるから、かゝる場合に於ては、貨物の購買若くは支配する勞働の分量即

1) Ricardo. Principles of Political Economy & Taxation, Gonner's ed. pp. 8—11.（但しリカアドの指摘は不完全）Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. I. S. 128—30.

2) この點に就ては他の機會に詳しく論ずる。

ち勞働の報酬も亦、貨物の交換價値の決定標準となり得るわけであるけれども、然らざる社會（勞働生産物が全部勞働者に歸屬しない社會、資本家的社會）に於ては、この二者をともに貨物の交換價値の決定標準とすることの不合理なるは云ふ迄もない。スミスが一歩かゝる原始的社會を出で、資本の蓄積、土地の私有行はれ、勞働生産物が資本家、地主、及び勞働者の間に分配せらるゝところの社會に這入るや否や、彼はかゝる社會に於ける價値論として、費消、支配勞働價値說と共に、勞賃、地代、及び利潤を以て貨物の交換價値を說明するところの生産費價値說を主張するに至つたのであるが、彼にありては、これらの關係は、漫然、費消勞働價値――生産費價値――支配勞働價値の關係なりとせられ、これら各々の價値論の本質及び關係が正當に理解せらるゝことなくして、遂に彼れの勞働價値說を不純に終らしめたるのみならず、多くのスミスの價値論の批評家をしてその解釋に惱ましむるに至つたそも〳〵の原因は、既に業に彼れの價値論の根本的命題に於て、右に指示したるが如き混亂不純が含まれてゐるに由るものであると云ふことができると思ふ。これ私が、本論に入るに先ち、こゝに彼れの勞働價値論の根本的命題に就て若干吟味するところある所以である。

（註一）　スミスの所謂支配勞働は價値の尺度を示すものであり、所謂費消勞働はその原因を示すものであるとして、スミスの價値論を解釋するものが隨分多い。かく解せざるもスミス、リカアドの價値論を、價値の原因と尺度とに分別して、解せんとするは、通常一般にとられて居るところの態度である。しかしこれらのものゝ多くは二つの價値尺度の概念を混淆してゐる。價値は（費消）勞働そのものであり、そが內在的尺度は勞働時間であり、價値（質及び量）の表章形態が外來的尺度即ち交換價値

であり、貨幣はその一般的表章形態即ち一般的價値尺度である、と云ふ態度をとりつゝ、彼等の價値論を解釋するに於て、甫めて彼等の價値論の眞意を捕促し得るものであると思ふ。論者の尺度概念は價値そのものより離れたるものであつて、それは主として價値の表章(形態)概念、即ち價値の外來的尺度概念たるに過ぎない。かくて彼等は勞働は價値の原因なれども、それが尺度ではない、アベコベに勞働は價値の尺度なれどもそが原因ではないなどゝ云ふに至る。

(註二) スミスの所謂支配勞働をかくの如く勞働(力)の價値、報酬と解するは、誤りであるとするものがある。シュトルツマン、カウラの如きはそれである。[1] しかし私は彼等の解釋(各々異なる)をとらぬ。たゞカウラの解釋の容れらるべきが如きスミスの文章がないでもない。スミス價値論の一混亂と見てよい。この點に就ての詳しき論議は他日の機會に讓る。

貨物の交換價値の決定標準としての費消勞働價値説と支配勞働價値説とは、その後リカアド、マルサスに依つて各々支持主張せられ、その間に幾多の論爭を見るに至つたものである。しかし乍らスミスが貨物の價値決定標準として、その孰れに重きを置きたるかは別問題として、勞働價値説それ自身としては、費消勞働價値説を以て、その本來的のものであるとするのが順當であらねばならぬ。何故と云ふに支配勞働價値説はさきにも述べたるが如く、結局勞働(力)の價値即ち勞働の報酬を以て貨物の交換價値を決定せんとするのであつて、それは寧ろ生産費價値説に屬すべきものであるからである。(註)

(註) 所謂支配勞働價値説は、結局勞働の報酬即ち勞賃を以て貨物の交換價値を測定せんとするものであるが、勞賃は勞働力の價格であつて、それは他の商品の價格と同じ樣に決定せらるゝものであるから、それ自身は決して他の貨物の價値決定標度として堪へ得べからざるものである。支配勞働價値説は同義反覆の循環論に陷れるものなること、一般生産費價値説の場合に同じ。

1) Stolzman, Die soziale Kategorie in der Volkswirtschaftslehre, 1896. S. 48. Kaula, Die Geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien, 1906, S. 148.

（二）以上スミスの勞働價値論に對して若干の考察をしたる後、愈々本論に這入りたいと思ふのであるが、その前に、未だ資本の蓄積、土地の私有の行はれざる時代に於けるスミスの價値論が如何なるものなるかを一瞥して置くことは、こゝに取扱うとする問題を吟味する上に尠からず便宜があるであらうと思ふ。

かゝる原始社會、即ち生産せられたる貨物の全部がその生産者たる勞働者に歸屬する社會に於ては、スミスに依れば、貨物の交換價値、關係を決定するものは、それが生産若くは獲得に費された勞働の分量であると同時に、それはその貨物が購買し、支配し若くは交換する所の勞働の分量である。この點に關する彼自身の詞を引用すること左の如し。

『かの資本の蓄積と土地の占有とに並び先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要なる勞働分量の比例は、それら相互の交換の規則たることを得べき唯一の事情なるがやうである。例へば狩獵民族の間に於て、一頭の海狸を殺すがためには、一頭の鹿を殺す勞働の二倍を要することを常とせば、海狸一頭は當然鹿二頭と交換せらるべきものであり、或は鹿二頭の價値あるべきものである。常に二日又は二時間の勞働の所産であるものは、常に一日又は一時間の勞働の所産であるものゝ二倍の價値あるべきが當然である。』[1)]

『かゝる事物の狀態の下に於ては、勞働の全生産物は勞働者に歸屬する。そうして貨物の獲得若くは生産に通常費されたる所の勞働の分量は、その貨物が通常購買し、支配し、若くは交換す

1) Smith, ibid. p. 49.

る所の勞働の分量を左右するを得る唯一の事情である。』[1]

スミスの價値論の解釋者の多くは、後に詳しく述ぶるが如く、スミスはかゝる原始的社會に於ける價値論としては、支配勞働價値說とともに費消勞働價値說をその間に何等の離隔なくして主張したのであるが、文明社會に於ける彼れの價値論に於ては全く趣が異なつてゐる、この各々の社會に於けるスミスの價値論の間には、前後一貫せざるところがある、と云ふ。しかし乍らそれらの價値論の間には、當然に、若干の變遷異同『一方――費消勞働――支配勞働(勞働の報酬)、他方――費消勞働(勞賃、利潤、及び地代)――支配勞働』はあるにしても、その本質上には、前後何等の差異あるにあらず、一より他に至る論理的進行は、大體に於て、自然であつて、その間には一貫せる態度が支持せられてゐると私は思ふ。その故は、原始社會に於ては、勞働生產物は悉く勞働者に歸屬し、それを分け合はねばならぬ資本家、地主がないがために、實際上支配勞働と費消勞働とは相一致し、支配勞働は兎も角費消勞働と共に、事實上貨物の交換價値の決定標準として堪え得るものであるとせらるゝのであつて(その實この場合支配勞働は單に費消勞働卽ち價値の相對的表章形態たるにすぎぬのであるが、スミスの相對的價値觀念からはかく解せらずして、彼は、却つて表章形態そのものに價値を見んとする)、假令勞働生產物が資本家、地主、及び勞働者の間に分配せらるゝ所の文明社會に於て、費消勞働價値說は地代、利潤、及び勞賃を構成要素とする生產費價値說の形をとつて現はれ、前者は貨物の交換價値の說明として漸次その姿をかくして、後者に讓るに至つたにしても、そうしてそれはかゝる社會に於けるスミスの價値論の

1) Smith, ibid. pp. 39—50.

中心を成すに至つたにしても、支配勞働價値說はそれらと共に、依然として支持せられて居るのであつて、要する所彼れの價値論そのものの本質上には、前後何等の變化なく、原始、文明兩社會を通じて、スミスの價値論には、支配勞働價値說と費消勞働價値說とが相交錯して提言せられてゐるのであるからである。そうしてさきにも述べたるが如く、この費消勞働價値說と支配勞働價値說とは觀念上相容れざるものであるがため、文明社會に於ける彼れの價値論に於ても同じく、吾々をして彼れの所謂交換價値の本體が奈邊に在るかを解するに惱ましむるのであるが、このことは原始、文明兩社會に於ける彼れの價値論に就て一樣は言はれ得るのである。

右は原始社會に於けるスミスの價値論に就て一言したのであるが、貨物の交換關係を支配する價値法則を究明するの價値は、現實の生産方法の下に於て現實に作用する價値法則を研究することの外に存在しない。依つて吾々は右に述べたるが如き遠き過去の社會、若くは非現實なる假想の社會より現實の社會に眼を轉じて、そこに勞働價値法則が如何に實際に於て作用するかをスミスに就て見ねばならぬ。これ卽ち私が本章に於て取扱はんとする所の問題である。

スミスは、資本蓄積せられ、土地私有の行はるゝ資本主義的社會に於ける貨物の交換價値を支配する法則として、勞働價値法則を如何に見たであらうか？　この問題に答ふることは、卽ちスミスのかゝる社會に於ける價値論を檢討することを意味するのであるが、彼れのこの點に就ての所說が明確に畫き出されて居らぬ結果、從來後に述ぶるが如く幾多の解釋を生むに至つたやうな次第であつて、この問題に充分なる答解を與へることは可成困難なる仕事である。この問題——

スミスは本來の形に於ける勞働價値法則の資本主義的生產方法の下に於ても同樣に作用することを信じたのであるか否か、若しそうであつたならば、如何なる意義と程度とに於て、彼はこのことを主張したのであるか、の問題、換言すれば、スミスに於ける(費消)勞働價値法則の妥當性如何の問題——を瞭にすることは、スミスの勞働價値說の勞働價値學說發達史上に於ける地位の如何なるものなるかを推知し得る所以であつて、後に現はれたる所のリカアド、マルクスの勞働價値說のこの點に就ての態度と對比して、吾々をして頗る興味を覺わしむるものがある。かくの如くにして又吾々は勞働價値法則の本來の意義、立場の如何なるものなるかを認識するに一歩を進むるを得るであらうと思ふ。私はこの點に就て、左に、諸々の解釋を顧みつゝ、若干の考察を試みるであらう。（未完）